

私の出身高校（長野県立伊那北高校）の同期会にはメール網があり日常的に活発な発信があります。特筆すべきは毎週一人が「あいうえお順」に発信する「リレー随想」です。幹事はその都度テーマを提案し、「高校時代の思い出」「現役時代の苦闘や楽しみ」・・・から始まったエッセイも、全員が80代に入った今、前回は「老いにどう立ち向かうか」、そして現在は「私の座右の銘と生活信条」となっています。

7月9日に発信した私のエッセイの送信文は次のようにしました。

「座右の銘と生活信条」について書き始めるといろんな思いが湧き出てきて長くなってしまいました。テーマは「人生の生き方」そのものに通じているからです。皆さんにとっては別世界と思われるかもしれない創価学会に入った自分がどんな生き方をしてきたか、その生きざまを綴ることも参考になるかも、との思いでまとめました。興味・関心のある方は目を通してみてください。内容ごとに区切っているので読みやすいかとは思っています。

20230709 北士会リレー随想

### 「私の座右の銘、生活信条」

最初に自分の人生の転機前後の**生活信条**について体験を交えながら綴ってみます。

- ☆ 自身の生き方の中には「今いるところでどうしたら最も役立っていくことができるか」との気持ちがいっつもあった。高校を卒業した直後に母親が脳溢血で倒れ長期入院。私は家庭の状況から大学進学を諦め東京・大森にある親戚の小さな会社の事務員として働くようになった。そこで20歳のときに創価学会の話聞き「母の病状をなんとかしてあげたい」との思いで入会した。そのころ「青年よ世界に雄飛を」との池田会長の指導を先輩の幹部から聞いた。刺激されて再び大学に進もうとする意欲が湧き上がった。仕事をしながらの受験勉強でなんとか早稲田の商学部合格した。会社では経理の仕事をしていたので、実務にも役立つからと、なんと入学金と授業料の全額を会社が負担してくれた。
- ☆ 大学を卒業すると国立にあるNHK学園高校（NHKのラジオ・テレビを利用した全国に生徒を持つ通信制高校）で簿記会計を教えていたが将来を考え、今度は自分が慶応大学と東洋大学の通信教育で英語と社会科の免許も取得した。そのとき母校に諸種の手続きに行ったところで「ソ連ハイライト旅行」との募集広告を見て「ちょうど社会科の免許を取得したところで体制の異なる国の事情を知っておくのも役立つだろう」と参加した（当時“鉄のカーテンの向こう側”と言われたソ連に関する情報は少なかった）。帰国後に旅行記を冊子にまとめたところ、それを見た学会の男子部の先輩から声をかけられ聖教新聞の編集部に入ることになったのだった。
- ☆ 新聞社に入って間もなく外信部が誕生し、4人の構成だったので大陸の担当を決めた。北米もヨーロッパもアフリカも、更にはアジアも英語ができればなんとかなる。自分以外の3人は東京外大など語学に強い大学の卒業だった。こちらは私立大の商学部。なんとか英語も操れたが彼らには叶わなかった。そこで英語に最も縁の薄い中南米の担当を申し出た。「ラテン・アメリカ」とも呼ばれる中南米の国々はブラジルのポルトガ

ル語を除きほぼ全ての国がスペイン語。必要に迫られてゼロからスペイン語の勉強を始めた。当時 33 歳。結果的にそれが一つの因となって中南米特派員へとつながっていたのだ。英語が弱かったお陰でスペイン語もできるようになったことがその後の人生を大きく拓いてくれることになっていった。

- ☆ 60 歳で定年になると、長い中南米駐在で叩き上げで身につけたスペイン語を学問的にも系統立てて勉強しておきたいことと、「第二の人生への再投資」との思いでスペインのマラガ大学に 1 年間留学した。それは人生で最も楽しく充実した期間だった。そこで後に続く人の参考にと「定年留学してみませんかー60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ」を出版した。その後「ドン・キホーテ」の舞台を訪ねたりレポートが信濃毎日新聞に連載 (5 回) された。それがきっかけとなり、おおそれた「世界文学紀行」なるものを始めたのだ。

「君たちは薄っぺらな本なんか読んでいないで時代に耐えてきた大作を読みなさい」と高校時代に聞いた小松先生 (ジョンサ) の言葉が影響していたかもしれない。特派員時代の取材と文筆体験を活かしたい、との気持ちもあった。でも旅費等の費用もかかる。そこでフライトはネットで格安便を探し、ホテルも三つ星以下にした。こうしてセルバンテス、シェイクスピア、ユゴー、ゲーテ、トルストイ、ミッチェル、モンゴメリー・・・と訪れた作品の舞台は 11 개국 12 作家 15 作品となった。これらの記事や写真の一部は新聞・雑誌に掲載されたが原稿料は取材費の半分にも満たなかった。でも自分のホームページに掲載され、また講演の材料となっていった。この秋からは府中市に本部のある TAMA 市民塾で半年間の連続講座につながっている。

- ☆ 人生は思いもかけずに転変するものだ。留学から帰国後に私は一時、体調を崩し鬱になってしまった。前途は真っ暗。希望も消えときに自殺を考えるまでのどん底に落ち込んだ。でもありがたいことに医学の力 (薬) と信仰の支えで鬱はほぼ 1 年で快癒した。そこで仕事先を探したがどこも無理だった。いつ再発するかもしれない鬱経験者を雇う所はなかった。行き詰まった私は誰でも受け入れてくれるシルバー人材センターに入会し駅前の自転車整理の仕事から始めた。青色の作業服。当初、恥ずかしいような気持ちも心のどこかをかすめたが「職業に貴賤なし」。身体を動かすことが健康にも良く駐輪場での利用者との触れ合いも刺激になった。以来「どん底にあった自分を拾ってくれた」みたいな感謝の気持ちもあり、同センターの理事や会報の編集長を務めたりもしてきた。またここから世界文学紀行の旅費も生み出すこともできたのだ。

- ☆ 体調が良くなってくると週 3~4 日、1 日 4~5 時間の自転車整理の仕事だけでは時間が空いた。もう少し創造的な仕事もしてみたい、と探していると都立砂川高校で国際理解を深める社会科のネット教材を作ることになった。現役時代の特派員体験やスペイン留学時の経験がそのまま役立ったのは嬉しかった。教材のタイトルは自分の生き方を映し「飛行機に乗ったドン・キホーテ」(HP に掲載しています) とした。さらに他校からも英検の受験者の指導を頼まれるようになった。

- ☆ この間、2 年ほど進学塾では大手の一つ「東京個別指導学院」の講師も務めた。そこで感じたことは塾代がとても高いことだった。これでは経済的に厳しい家庭では大変だ。当時シルバー人材センターには教員の免許を持っている会員が十数人いた。そこで巷

の塾の半額くらいで学習塾みたいなものを創設できないか、と動き出したが、子どもたちの事故の補償をどうするか、といった点で行き詰まっていた。ちょうどその時、昭島市の介護福祉課から「高齢者向けの英会話教室を創設できないか」との打診がシルバー事務局にあった。“渡りに船”で引き受け講師4人を集め起ち上げた。現在も「入門」と「初級」の2クラスで週1回開催している。

- ◇ 学習塾の創設を考えていた当時、まず子供たちの実態を知ろうと地元の中学校を訪ね校長先生にボランティアでの授業支援をお願いしところ快く応じてくれた。それはやがて「学習支援員」との肩書きが与えられ些少だが手当まで出るようになった。ときどき日本語の分らない外国人の子弟がいるときは自分の出番となる。そこで3年前に日本語教師資格試験を受験したが、力不足と加齢による記憶力の低下でさすがに合格には届かなかった。
- ◇ 留学から帰国して3年後には、シルバー人材センターの仕事もしながらSGI（創価学会インタナショナル）の事務局で渡航する日本の創価学会員、また海外から来日するSGIメンバーのアテンドを週2日ほどすることになった。そこでは留学する日本の学会員が多いのに気が付くと再び留学についての専門的な勉強を課して海外留学アドバイザーの試験を受験、資格を取得した。これはより広範な知見から具体的なアドバイスもできるようになってとても役立っていった。
- ◇ 2019年、喜寿が結婚50周年と重なっていた。記念として現役時代に約10年間駐在していたパナマを妻と訪問した。帰国してから33年。お世話になったパナマの国とメンバーへの「感謝の旅」がテーマだった。すでに亡くなった人も多くいたので現地の会館で追善の勤行会を。また病床にある人の家庭を訪問し激励。身近で特にお世話になった30人ほどを会食会に招待し感謝の思いを伝えた。一方で、二人の訪問を事前に知ったメンバーは会館でコーラスや民族舞踊などの舞台を催し300人余りで大歓迎をしてくれた。終了後には握手とハグが続き終わるところがなかった。現役時代の苦闘と心遣いが今も生きていることに熱いものが込み上げてきたのだった。
- ◇ 別の日には車でパナマ市内の見学をした。池田SGI会長の第2回パナマ訪問時には自分も一行の受け入れ責任者の一人だった。会長はパナマ国立大学も訪問した。その後、アメリカが統治していた「パナマ運河ゾーン」が2000年にパナマに返還され美しい運河地帯に新キャンパスが開かれた。入り口にはよく手入れされた「池田大作公園」が拡がりすぐ近くには「香峯子庭園」、奥の方には高さ4メートルほどの「母の像」が設置され、台座には桂冠詩人でもある池田会長作詞の「母」の詩が刻まれていた。我が師匠とパナマSGIへの高い評価が嬉しかった。
- ◇ パナマ日本人学校も訪れた。自分の在任時は100人以上いた生徒も、日系の駐在企業が少なくなり、訪問時には10数人の生徒が校歌を歌って歓迎してくれた。「校歌の作詞者が来る」と改めて練習したという。実は日本人学校の開校直後にパナマ在住の日本人を対象に校歌の公募があり、34作品の中から私の作品が採用されたという経過があったからだった。30年以上も過ぎて懐かしい校歌で出迎えを受けるというのもまた別の感動ではあった。
- ◇ パナマ在任中には池田SGI会長から筆文字で色紙に書かれた句をいただいていた。

「此の世をば パナマ広布に 夫婦して 生き抜く姿 諸天もつつまむー大作」

「此の世」とは生涯に通ずるだろう。「広布」とは仏教理念を基軸にした世界平和。

私はパナマから帰国してからも手紙をもらったメンバーには心からの激励の返信を書き、来日したメンバーにも食事をしながらでも声をかけてきた。この回の旅でも自発でできるかぎりの財務（寄金）をパナマ SGI にしてきた。「お世話になった皆さんに感謝の旅を」と定年直後から描いていた“見果てぬ 夢”をとうとう叶えることができたのだった。

- ☆ 一方、翌 2020 年の東京オリンピックはコロナ感染の拡がりで翌年に延期され、完全燃焼はできなかったけれど、大会ボランティアとして、晴海の選手村で世界から来日したアスリートのアテンドに英語とスペイン語の両方が役立ったことは嬉しかった。人生の貴重な思い出にもなった。また今も東京都観光ボランティア・スタッフの一人になっているが、コロナ禍で外国人の訪日がなく 4 年近く出勤しなかった間に加齢も加わり、今後どうするか逡巡しているところだ。
- ☆ 創価学会員としては居住する団地の会員の訪問や激励、また近くの横田基地に在住するアメリカ人の SGI メンバーのアテンドをしている。コロナ禍の前は基地内のチャペルでの集いに参加し、仏教（日蓮大聖人）の教えや池田 SGI 会長の指導等を一緒に勉強したり激励したりしてきたが、現在は ZOOM によるミーティング。世界中どこからでも参加できるので慣れてくると対面より ZOOM の方が拡がりがあるような気もしている。
- ☆ 現在は空き時間にギターの実習に励んでいる。スペイン留学時に滞在していたアパートのすぐ近くにギター工房があった。「せっかく本場にいるんだから」とギターを買おうとスペイン人の先生に手ほどきを受けた。現在、住んでいる団地マンションの住人は高齢化しつつあり車椅子の人も増えてきている。そこで、なかなか外出が難しくナマの音楽を聴く機会に恵まれない近隣の方々をホームコンサートに招いてあげたい、なんて気持ちが湧いてきて練習に力を入れている。下手な演奏も後に続く文学紀行の懇談で楽しんでいただければなんて。
- ☆ 思えば鬱後の人生はすべてを変毒為薬（「へんどくいやく」＝仏教用語で「毒を変じて薬となす」との意）して、自分の経験と能力に最も合った仕事やボランティアに就くことができ、予想をはるかに超えた人生が開かれてきたと実感している。助力をいただいた方々にも心から感謝しているところだ。（信仰の経過は HP の「ミニ自分史」に詳しく綴っています）

座右の銘、人生訓、生活信条は多岐にわたり短くまとめるのが大変でした。最初に述べているように、私は 20 歳のときに創価学会に入会し今日まで 60 年余その道を歩んできました。与えられたテーマに沿って筆を進めていくと、現在の自分を形作ってきた精神的な柱は創価学会名誉会長である池田大作先生の指導と激励です。そこで最後にその指導の一端を綴ってみます。

以下は機関誌の聖教新聞や大白蓮華に掲載されたなかから、特に高齢者向けの指導です。一部は要約したり合体したものもあります。自分も高齢になった今、心に刻んでいる「座右の銘」の一部です。多くが信仰の世界の外でも通ずる「人生の道理」ではないかと思っています。

### 高齢となった今の私の「座右の銘」

- 人生の持ち時間は長い目で見れば、各人、大差ないものだ。要はどれだけ「深く生きた時間」をつくったかである。その集積が人生の宝となる。
- 祈りの中身がその人の境涯である。志が人を作る。大きな志は大きな人生を作る。
- 他の人の不幸の上に自分の幸福を築かない。
- 定年を迎えてからその人の真価がわかる。退職してからが信心の真価を発揮する本舞台である。
- 創価とは学び続ける人の異名である。仏法を持った人は、いくつになっても日々出発、日々成長である。夢を追ってチャレンジしている人はいつまでも若々しい。
- 声は力だ！勇気の声、希望の声が勝ち戦を開く。大事なものは声だ。生命力のある声、張りのある声で皆に元気を与えていくのだ。道を歩くときも、さっそうと歩き、会員、同志の皆さん、近隣の方々とすがすがしい挨拶を交わしていくのである。一人ひとりが学会の全権大使である。
- 要するに、最後の最後に会心の笑みを満面に浮かべられる人生かどうかである。生涯を振り返り、「自分は人生に勝った。楽しかった。悔いはない」と言える人が勝利者である。
- 信心こそ最高の財産である。我が子に正しき信心を継承していくことこそ、親子して、また家族共々に永遠の幸福の軌道を歩み行くもっとも確かな道である。
- 晩年における最高最大の信心の実証とは何か――財産や地位、名誉ではない。ありのままの人間としての人格の輝きにある。皆を包み込む温かさ、人を思いやる心、不屈の信念、あくなき向上心・・・それらが育む精神の光彩こそが人格の輝きと言ってよい。
- 「創価学会とは何ぞや」と聞かれたら「私を見てください」といえる自分になろう。「創価学会の〇〇さん」と地域の人々から称賛される存在になっていくこと。「誰がなんといおうと、自分は偉大な創価学会の代表だ」と胸を張っていく。I am the Soka Gakkai. でいこう。

28歳で聖教新聞に入って SGI（創価学会インタナショナル）関係の記事を担当していた当初、メンバーが在住する国は 100 か国に満たなかった。それがこの半世紀で 192 か国地域に広がり地球上のほとんどの国でメンバーが活躍するようになっていきます。中南米に広まったキリスト教は、コロンブスが 1492 年に新大陸に到着以来、侵略または植民地化の流れの中でこの 5 世紀の間に布教されてきた歴史を思うと、人間生命を最も尊重する仏教が平和的な「対話」でこの半世紀の間にここまで広まってきたのは現代の奇跡と言えるかもしれません。

私は「大満足の人生だった」と思っています。これから創価学会創立 100 周年の 2030 年まで元気で皆のため世界平和のために役立っていくのが目標です。

清水 武

ホームページ <http://donky.la.cocan.jp>